

これから大切なこと

森 田 喜 基

奨励者紹介[もりた・よしき]

同志社大学キリスト教文化センター准教授

[研究テーマ] 日本におけるキリスト教教育の歴史と実践

都に上る歌。ダビデの詩。

見よ、兄弟が共に座っている。

なんという恵み、なんという喜び。

(詩編 133編1節)

愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべてなされているのです。

(ヨハネの手紙一 4章 11—12 節)

共に座れる時には

今自宅で、下宿で、学びを続けておられる学生の皆さん、ここは京田辺キャンパスにあります、同志社京田辺会堂言館(KOTOBA-KAN)、すなわち礼拝堂です。

緊急事態宣言が一旦解除されたとはいえ、今自宅で、下宿で、学びを続けている皆さんとは、この礼拝堂で、また教室で一緒に座ることができない状況が続いています。詩編133編「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」を書いた古代の人の思い、この喜びを、ご一緒に噛みしめることができることを楽しみにしています。

もし、秋学期に対面授業などが再開できるようになったら、それはそれで環境がガラッと変わりますので、心に負担を感じることもあるかもしれません。キリスト教文化センターでは京田辺、今出川両校地に4人の牧師がスタッフとしております。人生における悩みや不安の相談に応じていますので、校内入構が可能となった場合には、ぜひキリスト教文化センター事務室をお訪ねください。

今回の新型コロナウイルス感染症拡大について、私たちの多くがこれで終わったとは勿論感じていないと思います。私たちの生存そのものに対する脅威がそこにあります。しかし、このような本当に苦しい時にこそ、私たちは大切なことに気づかされたり、新しい可能性に挑戦したりすることができます。

「のどもと過ぎれば熱さを忘れる」のが私たちの常ですので、これからに備えるうえで、改めてこの未曾有の事態を踏まえ「これから大切なこと」について聖書を通して一緒に考えてみましょう。

人間は良い意味で「弱い」

このコロナ禍が私たちに示したことに、「人間が如何に弱いか」ということがあります。ただ「弱い」ということを聖書はマイナスだけではとらえていません。この「弱い」を積極的な意味として受け取るならば、「だから人は一人では生きられない」とつながることができるでしょう。本来、人は助け合わなければいけないということです。人間は一人では生まれてくることができませんし、また産むほうの母親も一人で産むことは大変困難です。デラウェア大学の文化人類学者カレン・ローゼンバーグという人は、出産、また骨盤の進化から、サルから人間への進化を語っています。お猿さんやゴリラは人間に近いけれども、母猿は一人で出産することができます。しかし、人間は助け合わなければ、出産を無事にすることが困難です。すなわち、人間社会はその生命の誕生の時から助け合わなければならない、そうやって社会を形成する生物なのだと言います。人間の社会は、助け合うことで成り立つことを、語っています。

私たちは自分の力だけで、自分の努力だけで生きている気になることがありますが、人は自分の努力や成功だけでは生きていけないことに必ず直面します。自分一人の努力だけではどうにもならないことがあることは、コロナ禍にあって、多くの人が困難な状況に置かれた今、改めてこのことを実感いたします。

「人は助け合わなければならない」。それは当たり前のこととして、今までも大切なことでした。しかし、疫病と付き合っていかなければならなくなったこの時代、これはさらに大切にしなければならいでしょう。

また文字どおり「弱い」

しかし、今この時、「人間は弱い」ということを、文字どおり思い知らされたマイナスの部分もありました。Stay home が実施される中、どうしても外に出て仕事をしないとけない方々がいます。その方々の仕事なくして社会は回らないのです。ごみを収集する、流通を回す、危険と隣り合わせの中で新型コロナウイルスに立ち向かう医療従事者など、そのお一人お一人の支えがなければ、私たちの生活は崩壊してしまいました。その方々に感謝を表すイベントなどが行われていますが、その前提として、そういった働き人に対する誹謗中傷があったわけです。今回の新型コロナウイルスのことで、改めて思われます。私たち人間は、不安と恐怖によって「ありがとう」を言うべき相手を、その弱さゆえに罵ってしまう、なすべきことの逆の行動にもでる存在です。不安と恐怖に縛られていると、そのような反応を私たちはしてしまうことがあります。これは他人事ではなく、私たちの身近にもある弱さです。そんな時代に「これから大切なこと」を今日の聖書は時代を超えて、教えています。

「人一人は大切なり」

ヨハネの手紙一4章 11節は「神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべき」と語ります。そして「いまだかつて神を見た者はいません」と。聖書に示されている神は、目には見えないのです。私たちは神を見ることはできません。では見えない神など、やはりいないのでしょうか。この聖書の箇所は、私たちが互いに愛し合うならば、神は私たちの内にある、と語っています。

1600年ごろに日本で刊行されたキリシタンの書物『ドチリナ・キリシタン』によると、400年前に来日していたローマ・カトリックの宣教師は、ここに出てくる「愛」という言葉を「ご大切」と訳しました。「愛する」という言葉は、何か「こしょばい」ものがあるかもしれませんが、「大切に使う」と言うとしっくりくるという方

もおられるかもしれません。すなわち「神があなたを大切にしているように、互いに大切にしたいなさい」とその時代、聖書を訳していました。

同志社の創立者新島襄牧師のある式辞に出てくる有名な言葉に「諸君よ、一人一人は大切なり」というものがあります。実はこの言葉は、退学した一人ひとりのことを新島は念頭に置き、語ったとされています。神が一人ひとりをかけがえのない存在として見守って、命をはぐくんでくださっている。これはキリスト教が教育に携わる原点的宗教観、人間観です。「愛されている、ほんまかいな」と感じる方もおられるでしょう。「大切にされているって聞いても、そんなん目に見えへんし、わからへんやん」と思う方もおられるでしょう。しかし神によって、その人こそ大切なのだと聖書は語っていますし、新島牧師はその聖書の言葉を地で行く人でした。

不安や恐怖に縛られない

私たちが、聖書によって解き明かされた、神の愛のまなざしを受け入れることができるならば、私たちが縛ろうとする不安や恐怖から解放されて、今この時、互いを大切にすることができると信じます。その安心感の上に、今重荷を抱えて、弱い立場に立たされている人と、互いに愛し合う時に、私たちの内に神がいると聖書は語ります。困難な時代の中で、このことを心に刻みながら、過ごしたいと思います。そしてこの世界に、神の愛が注がれていることを、私たちが示していけるように、不安や恐怖に縛られない、歩みを求めていきたいと思います。

2020 年 6 月 15 日 チャペル・アワー（インターネット配信）「奨励」記録